

## ダンスが行われる場の多様性を見つめる

八木ありさ（日本女子体育大学）

シンポジウムの皮切りとして、ダンスの場の多様性を想起するために、ダンスが果たす機能と、ダンスする人々の様子を眺めてみたい。

（1）ダンスの性質と考えられてきたこと

①遺跡や民族舞踊に見る「おどること」

考古学的史料の中に、日常の生活行動とは異なり明らかに舞踊してる状況を写し取った壁画や造形物などがあり、これらからは「なる」行為と密接な舞踊の性質が推論されてきた。

②遺物で見ることのできない「おどること」

ヒトの発育発達に準えて想像すると、記録に残らぬ舞踊の始原の姿は、快感情と関わって自然と発生、展開したであろう身体操作の反復に求められるのではないかと。

③語の由来から見たダンスの性質

日本語の「舞」「踊」「振」のもつ意味について、先達が運動の性質とともに示していることの他、他言語においてもいくつかの共通する性質を認めることができる。それらは強い快感情と関係することと、高度な身体操作と関係することとに分類することができそうである。こうした性質が単独や複合で発揮されるところに、ダンスする、あるいはさせる目的も生まれているのではないかと。

（2）ダンスの機能

「遊戯」や「祭儀」については先に見た。これらのダンスはそれぞれの目的を達するために更に美を高めるといった媒介目的を持ち得るし、「審美」が独立してそれ自体を目的とする遊戯的活動へと展開することもあるはずだ。また共に行う、同調的に行うなどの方法から、「交流」を目的として実施され得るし、更に視点を変えれば集団を「管理」する上で都合の良い状況を生み出すことができる。そして、これら全ての要素に跨って、文化伝承としても人間教育としても、価値を伝え学ぶ「教育」

との関わりが見えている。

それでは、今大会の一般研究発表にも垣間見える、現下の健康開発や社会問題に対する取り組みの視点で見るとどのようなダンスの場が生じているのだろうか。

（3）さらに多様化するダンスする目的

①体力が低くても・疾患を抱えていても、ダンスを楽しむことができるし、ダンスを通して問題の拡大を抑え、場合によっては改善が期待できる。

②多様な心身を包摂するインクルーシブな活動としてダンスが人気を博している。

③社会的な孤立の中で、社会教育的に働くダンスや、生きていくことそのものが厳しい日常から解き放ってくれるダンスがある。

④寄って立つところが危機に瀕しても、ダンスで繋がり、身体文化を顕現させることで、自分達のアイデンティティが継承されていく。

（4）多様性を引き込むダンスの性質

アーティストは目的そのものとして、教育者やセラピストは自他と出会う道具として、健康開発者は心身活性化の道具として、社会開発者は人々の出会いと潜在性発掘の道具としてダンスを眺め、人々にダンスとの出会いを用意しようとしていることがわかる。一方、ダンスする人々は場の提供者の思いとは別に、それぞれの多様な経験ベースでダンスとダンスの場を意味づけてゆく。ダンシングの身体を純粋に楽しんだり、ダンシングの中で受け止められる自分について感じ考えたり、ダンシングで達成できることを期待したり、ダンスの場が提供するピア集団との出会いを求めたり…。

こうした多様な場が生まれる背景には、「ルールや道具に縛られずに活動できる」「各自の体力や好みに応じた形で実現できる」「言葉を超えて感じ取る〈そのひとまるごと〉がクローズアップされる」といった、さらなるダンスの性質があると考えられる。